

海舟だより

第3号

大田区立勝海舟記念館

平成31年夏開館！

勝海舟が眠る大田区・洗足池の地に、
日本初の勝海舟記念館がオープンします



洗足軒は、明治24年海舟が現在の大森第六中学校の地に構え、昭和2年には旧「清明文庫」の隣地に移転されました。

現存する写真等、情報が少ない建物です。写真や当時の新聞など様々な史料から鋭意調査を進めています。

今後は地域の方々にも情報を頂きながら実態解明を進めていきます。

勝海舟と西郷隆盛 ～江戸無血開城に至る道～

第二話 江戸を救う交渉と決断

海舟が属する旧幕府方と西郷が属する新政府方の両陣営は立を深め、ついに戊辰戦争へと突入します。慶応4年(1868)月、鳥羽伏見の戦いに敗れた旧幕府方は、次第に劣勢に立たれました。

新政府軍が江戸に迫った3月、海舟と西郷は各陣営の代表として再会します。会談は、13日に高輪の薩摩藩下屋敷、14日に1町の薩摩藩蔵屋敷で行われました。実は9日にも駿府(静岡県)にて旧幕臣山岡鉄舟と西郷との間で会談が行われており、その際に西郷は「徳川慶喜の備前藩お預け」や「完全武装解除」を含む降伏条件を提示しています。一方、14日の会談で海舟が西郷に示した条件は「慶喜の水戸謹慎」や「石高削減分の武装解除」など、西郷案とはかけ離れたものでした。妥結は困難と思われましたが、西郷はこの条件を呑んで江戸総攻撃の中止を決めています。この背景には海舟に対する西郷の信頼があったのでしょう。

第三話につづく

大田区立勝海舟記念館では、江戸無血開城に関する資料の展示も予定しております。



ふるさと納税

日本初の勝海舟の記念館にあなたのお名前を残しませんか

この度、より魅力的な記念館にするため全国の皆さまからお力添えをいただきたく、勝海舟基金を設置しました。勝海舟の想いを後世に残し、全国の方から愛されるような記念館にまいります。皆さまからの温かいご支援をお願い申し上げます。

●勝海舟基金の目的

勝海舟に関する資料の購入や修復等に活用させていただきます。

●目標金額 1億円

●寄附お申込みの方法

インターネットによるクレジット決済・郵便局の払込取扱票等詳しくは大田区ホームページをご覧ください。

●返礼品

寄附金	特典内容
3千円以上	・勝海舟記念館ご招待券
1万円以上	・年間パスポート ・記念品(非売品)
10万円以上	・寄附者名を銘板に掲載 ・年間パスポート ・記念品(非売品)

プロモーションビデオ

85秒の紹介動画が完成しました！
大田区ホームページからぜひご覧ください。

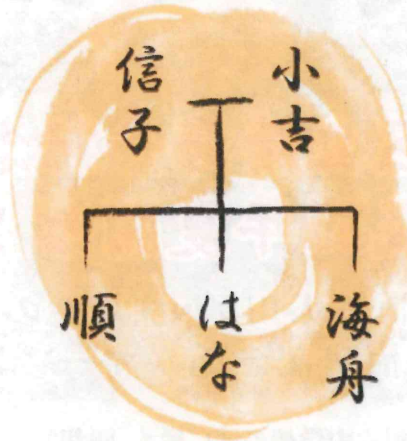




勝海舟の父と母

海舟の家族

勝海舟の父・小吉(惟寅、夢酔)は、旗本・男谷平蔵の三男である。7歳の時旗本・勝家の婿養子となりました。妻・信子との間には、海舟・はな・順、3人の子がいました。



父・小吉

生来腕白であり、長じては喧嘩や剣術に明け暮れ、放浪することもありました。父や養父のような幕府の役職にもつかず、無頼漢のように過ごした小吉でしたが、一方では、剣術の腕を活かして喧嘩を仲裁するなど、よく市井の人々と交わっていたようです。

母・信子

海舟の母・信子は気丈な女性でした。夫・小吉の死後、海舟の妹お順が佐久間象山に嫁ぐ際にも、信子が象山を気に入り、貴方なら娘を差し出しても良いと言ったと伝わります。ここに、小吉亡き後の勝家を支える信子の姿が伺われます。息子・海舟が貧しい時期や、出世後の地方に赴いている間も家を守り、戊辰戦争の際にも動揺せず海舟に道を示しました。海舟はこの母に深く感謝していたようです。

子・海舟への影響

息子である海舟も、後年市井の人々とよく交流していました。『氷川清話』には「政治は、理窟ばかりで行くものではない。実地に就いて、人情や世態をよくよく観察し、その事情に精通しなければ駄目だ」、「おれも維新前には、種々の仲間と交際したヨ」との海舟の言葉が残されています。幼少の頃から、海舟は様々な人々と接する父小吉の姿を見て育ったと思われ、その経験が海舟の人物形成に大きな影響を与えたのかも知れません。

父・小吉と子・海舟

9歳の海舟が犬に噛まれ重傷を負った際には、その夜から水垢離をして息子の回復を祈願し、幼い海舟を抱えながら寝て看病を行いました。これは、小吉の自記である『夢酔独言』からよく知られるエピソードです。情愛に満ちた小吉と海舟との父子関係は、後年の人々にも感動を与えています。

親子の関係を綴った作品



大田区立郷土博物館にて「大田区の勝海舟」展示中です。
(勝海舟記念館開館までの予定)

馬込文士・子母沢寛 著『父子鷹』

本書は、江戸末期の下町を情緒豊かに描く中で、少年・勝麟太郎(後の海舟)の成長を父親・小吉の目線でとらえ、厳しくも慈愛と父性愛にあふれた親子の関係を綴った歴史小説です。昭和30年5月から翌年8月まで読売新聞夕刊に連載されました。

小説家 北海道生まれ
1892~1968

馬込文士。大田区地域の字名をペンネームにした作家